

國學院大學學術情報リポジトリ

「源平合戦図屏風(一の谷・屋島合戦図屏風)」
諸本の改変方法と関連資料：
『平治物語絵巻』や「平家物語扇面絵」など

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 悦子, Ito, Etsuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000473

「源平合戦図屏風（一の谷・屋島合戦図屏風）」 諸本の改変方法と関連資料

— 『平治物語絵巻』や「平家物語扇面絵」など —

伊藤悦子

一、はじめに

『平家物語』を題材とした屏風絵は、近世を中心に数多く制作された。中でも、一の谷合戦と屋島合戦を対とした「一の谷・屋島合戦図屏風」は現存数もとりわけ多く、「源平合戦図屏風」といえば、この類の屏風を指すことが多い（本稿でもそれに従う）。

「源平合戦図屏風」諸本は構図や図様に類似性が見られ、共通祖本から派生していると考えられる。かつて、川本桂子氏・田沢祐賀氏により、諸本の基礎的な分類整理が行われたが、美術史側からの視点であることや、データが古く、対象とする本数が少ないなどの問題があり、本格的な諸本分類を確立することが、今後の屏風絵研究を進める上での大きな課題となる。稿者は以前、左隻「屋島合戦図」を中心に場面比較を行い、約四十本の諸本を十二種〔1〕〜〔12〕に分類した^①。更に、右

隻「一の谷合戦図」についても同様の作業が必要だが、屋島合戦に比べると、一の谷合戦はエピソードの数が多く、諸本間の異同も複雑である。加えて、前回は粉本（作画の際に手本とした資料）に触れていなかったことや、管見によってあらたに存在を確認できた屏風も増えている。そのため本稿では、諸本分類を確立させるための前段階の作業を行い、今後の屏風絵研究の足がかりになることを目的とする。まず第一に、「源平合戦図屏風」諸本の基本的な概念を整理し、共通性の高い諸本を纏める。第二に、粉本ついて論じる。『平治物語絵巻』の影響力の大きさや、これまで指摘がなかった「平家物語扇面絵」や押絵貼屏風との関係性などを考察し、粉本研究の重要性を提示したい。

二、基本的概念の整理

諸本の数が多く、その内容も多様である場合、そもそもどのようにに作品を定義し、どのようにに分類するのか、まだ定まっていない。本節では、まずAで、本稿が対象とする「源平合戦図屏風」を定義し、BおよびCで、二種類の分類の可能性を提示したい。

A. 本稿で対象とする「源平合戦図屏風」の定義

一口に「源平合戦図屏風」といっても様々な形式があるが、本稿で対象とする屏風は以下の条件である。その結果、三十六本を【別表1】に示した（本稿に付した〔No〕は、【別表1】の「No」項目に対応する）。

①画面いっばいに合戦全体を大観的に描き、『平家物語』に記されているエピソードを散りばめたもの（前掲、川本氏による分類の第一類に該当する）。

②原則として、右隻に一の谷合戦、左隻に屋島合戦を配す。ただし、一雙に一の谷合戦のみを描くもの、壇の浦合戦を含むものなど例外もある。

③江戸後期以降（十八世紀）に改変されたと考えられる独特の画風を持つ屏風は対象外とする。なお、祖型の保持率は、屏風そのものの成立時期とは必ずしも一致しないため、現段階では成立時期にはこだわらず、祖型からの距離を基準とする。

B. 構図の類似による分類—（智積院本系統）・（双子本）・（姉妹本）—

「源平合戦図屏風」の基本構図は、右隻「一の谷合戦図」では、画面の中央右下段寄りに平家館、左から下段にかけて海、右に生田の杜、上段に鶴越を配し、左隻「屋島合戦図」では、中央左上段寄りに平家館、左に牟礼高松、右から下段にかけて海を配す。両者を並べると、海を中心として左右に平家館が配置され、その周囲に『平家物語』のエピソードが散りばめられる構図となる（〔図1〕）。

「源平合戦図屏風」の祖本は現在確認されていない。現存諸本中、最も祖型を留めているとされるのが智積院本「一の谷合戦図屏風」（No.1）で、室町末期の成立と考えられている。川本氏は智積院本の場面描写について、「それぞれに独立性が強く、絵巻の場面を取り出して適宜散らし置いたような印象を与える」とし、絵巻のような粉本をもとに成立した可能性を示唆している。だが、智積院本にも不自然な箇所があり、祖型そのものではない。いっぽう、左隻「屋島合戦図」については、宇和島本（No.2）などが祖型をよく残していると言えらる。本稿では、諸本の基礎的な分類整理として、共通性が高い諸本をなるべく一括りにし、煩雑を避けるために便宜的な仮称で

紐付けしておく。

（智積院本系統）：現存諸本のうち、智積院本をはじめとする、祖型をよく保っている屏風群を総称するものである。川本

分類の第一類甲種、田沢分類のA種、前掲の拙稿による分類【1】【2】に該当する。

（双子本）：諸本間でも、とりわけ共通性が高く、概ね同じ構図・

図様を持つ屏風が存在する。部分的な異同や絵師の個性による相違などはあるが、積極的な改変は希薄で、粉本を忠実に描く姿勢が認められる。そのため、一見すると双子のように酷似している。対象が三本以上の例もあるが、これらを互いに（双子本）の関係にあるとし、本稿では特に断らなければ同じ屏風として扱う（別表1）では、三本の例の場合には分かりやすく（三つ子）と表した。ここで留意しておきたいのは、配色に関しては大きな異同がある点である。おそらく、彩色や色注がほとんどない下絵・模写絵から、絵師達が独自の判断で配色するケースも多かつたのだろう⁵⁾。

（姉妹本）：諸本間で、部分的に他の屏風とは異なる共通した

構図を持つ屏風も存在する。その部分に関しては、近い段階で同じ粉本に遡れることは明白だが、全体的には（双子

本)ほどの共通性はないため(姉妹本)と仮称する。

これらの括りは、膨大な諸本群を分類する上での基盤になると思うが、【別表1】に示したように、こうした関係にある諸本は少なくないのである(本稿では取り上げていないが、(双子本)と姉妹関係、つまり(双子本)の(姉妹本)に位置付く諸本も存在する)。

C. 『平家物語』の章段範囲による分類

「源平合戦図屏風」の祖型は、覚一本の本文に準拠している。各場面が、『平家物語』のどの章段を範囲とするのかも分類基準の一つになる。【別表2】に、「一の谷合戦図」の章段ごとの場面と、一部の諸本を取り上げ、場面の描写有無を示した。

〈智積院本系統〉での章段は、「一二之懸」から「落足」までが描かれるが、それ以降は、章段「老馬」から三場面が加わるようになり、章段の範囲が拡大する。また、章段「知章最期」の場面「井上馬、船へ／陸へ」では、知盛が井上馬で海上を舟に向かう場面に加え、異時同図法を用いて、舟に戻った知盛が馬を陸に返す場面が追加される。後者のみを描く諸本も存在しており、両者を描く諸本との先後関係は断定できないが、祖型の保持率などから判断すると、まず両者が描かれるようになり、

その後、後者のみを選択して描く諸本が現れたのではないかと思われる。

画面全体の特徴としては、智積院本は、人物が概ね特定可能なほど最小限の描写であるが、改変に伴い、人馬の数が増大することによって、個々の場面が不明瞭化していく傾向がある。

特に海側には平家公達のエピソードが集中するが、章段「知章最期」の場面「業盛最期」「経正最期」など、『平家物語』に記述が少ない場面は、絵のみでそれと判断することは、絵師達にも極めて困難であったはずである。そこに、大勢の人馬が描き加えられることで混戦する軍勢に紛れてしまい、時代が下るにつれて、戦闘集団の一部としての認識で描かれたり、(おそらくは改変の際などに削除されてしまい)その場面が存在しない諸本も現れる。

また、人物が混同されるケースもある。たとえば、章段「坂落」の場面「教経逃走」において、馬で逃走する教経の姿を描かない諸本が複数存在するが、その要因は、祖型を保つ智積院本に同場面が無いからではなく、近接する場面「盛長逃走」に描かれた、馬で逃走する盛長の姿が教経のそれと近似しており、両者が混同されたためであると考えられるのである。

建築物を含めた背景描写も増加傾向がある。平家館の構造は

複雑化し、木戸口や棟の数が増え、城壁が二重になったり石垣が描かれるようになる。章段「老馬」では、通盛と小宰相がくつろぐ仮屋が追加されている。⁷⁾

このように、改変方法の一つとして、章段の範囲を広げて場面を追加したり、異時同図法を用いて一つのエピソードを二場面描くなどして内容を拡大させることにより、物語としての見どころを画面一杯に繰り広げる意図があったと考えられる。だが、それと同時に、人馬の増大や建物の複雑化などによって各場面の自立性が薄れ、平家公達末路をはじめとする場面の不明瞭化が生じるという問題も発生したのである。

三、先行研究において指摘された粉本

それでは、もともと描かれていた場面は、どのように改変されていったのだろうか。改変の際にいくつかの粉本やテキストを用いていることは、先行研究で指摘されており、以下に簡条書きであげる。⁸⁾

- a. 天真寺本 (No.4) : 『平治物語絵巻』「六波羅合戦巻」(「生田の戦い」)
- b. 大英本 (No.5) : 同「六波羅合戦巻」(「生田の戦い」)

之懸」(「経正最期」)、『源平盛衰記』(「業盛最期」)

- c. 旧麻布本 (No.7) : 同「六波羅合戦巻」(六十箇所以上)、赤間神宮所蔵「安徳天皇縁起絵図」(「盛俊最期」)「忠度最期」など多数)、謡曲『簞』(「二度之懸」)

d. 耕三寺本 : 謡曲『簞』(「二度之懸」)

- e. 個人蔵「一の谷合戦図屏風」(一隻) : 謡曲『簞』(「二度之懸」)

f. 久留米文化財収蔵館寄託「源平合戦図」(江戸後期の屏風下絵カ) : 明暦二年絵入版本『平家物語』(「鷲尾父子」)「八艘飛」など)

たとえば、c 旧麻布本は、「六波羅合戦巻」や「安徳天皇縁起絵図」を多用しながら、「二度之懸」の場面では謡曲『簞』を用いて景季の背に梅の枝を描くなど、場面に応じて複数の資料を使い分けている。なお、「六波羅合戦巻」を利用して a・b・c の三本は改変箇所に通性は見出せず、おそらく影響関係はないものと考えられる。

次に、b 大英本の例を二つ取り上げ、具体的な改変方法を確認しておく。一つは「一二之懸」で、祖型と思われる智積院本【図2】などでは、先頭に平山主従、その後ろに熊谷父子主従の計五騎が木戸口に向かい、手前の平山旗差が射られて落馬

する様子が描写されており、覚一本の「平山は身にかへて思ける旗さしをぬさせて、敵の中へわていり」の瞬間を捉えている。大英本（【図3】）の改変では、熊谷父子が手前に移動し、馬を射られて徒立ちになっており、「熊谷は馬のふと腹をさせて、はぬれば足をこいており立たり。子息の小次郎直家も…（略）馬よりとびおり、父とならでたたりけり」の瞬間を捉えている。大英本は、「一二之懸」の木戸口における熊谷・平山の活躍自体は変えることなく、比重を平山主従から熊谷父子に移したのがある。この際に利用されたのが「六波羅合戦卷」なのだが、単純に絵巻から図様をコピーしたのではなく、田沢氏が指摘する【図3】②④に、更に①を加えた四場面から図様を取り出し、それを合成して一つの場面にするという手の込んだ手法を用いている。

もう一例は「業盛最期」である。智積院本や宇和島本（【図4】）では、地上で土屋五郎に組み伏せられる業盛の姿が描かれているが、覚一本には「藏人大夫業盛は、常陸国住人土屋五郎重行にくんでうたれ給ひぬ」としか記述がなく、したがって、この図様は絵師の想像力で描かれていると言えよう。大英本（【図5】）は、古井戸の中で泥屋四郎（兜のみ確認できる）を押さえる業盛の首を掻こうとする泥屋五郎の場面に描き変えている

が、その内容は、『源平盛衰記』の「古井ノ中ヘコロビ入テ、泥屋ハ下ニナル。兄ヲ討セジトテ、泥屋五郎落重テ、大夫ノ甲ノシコロニ取付テ」の記述に一致する（八坂系諸本もこの点同様だが、「ある小家の前に、ふる井のありけるに」（中院本）とする「小家」は描かれていない）。

以上、先行研究による指摘箇所には、若干の考察を加えた。もしもこれ以外の諸本が、たとえば大英本の改変箇所と一致すれば大英本と同系統になるわけだが、現時点では、「業盛最期」の古井戸の描写は、大英本の（双子本）である善徳寺本（No.6）のみである。この他、霊松寺本（No.30）の「坂落」では畠山重忠が馬を担いでおり、『源平盛衰記』の内容を反映している。『源平盛衰記』を参照している諸本が複数確認できるにもかかわらず、『源平盛衰記』を主題とした「一の谷・屋島合戦図屏風」の例がほとんど見られないのは、それだけ祖型の構図が固定化・流布していたことの、異なる諸本を元に新たな構図を起こす必要性がなく、部分的な改変での利用に留まったからではないだろうか。

四、「源平合戦図屏風」の図様の改変と関連資料

A. 「六波羅合戦巻」の借用から見える系統

「一二之懸」の図様は複数の諸本に近似が見られるが、その内容は複雑である。たとえば、誓願寺本（No.10）（〔図6〕）の場合、徒立ちの熊谷父子と射られた馬は大英本に近似しながら、平山主従は旧麻布本（〔図7〕）に近似しており、熊谷旗差はいずれとも異なっている。また、旧麻布本では騎馬の平山（もしくは直実か）が左手を前に突き出しているが、誓願寺本では徒立ちの直家が同ポーズである。なお、誓願寺本には大英本・旧麻布本いずれとも異なる箇所「六波羅合戦巻」からの借用があり、後述するが、誓願寺本や旧麻布本には、「平家物語扇面絵」との共通性も見られるのである。

このように、一つの場面を取ってみても、複雑な過程を経ながら成立していることが分かる。【別表1】のうち、明らかに「六波羅合戦巻」の図様を借用していると考えられる諸本は1/3近くが該当する。今後の調査によっては該当諸本が更に増える可能性があるので断定はできないが、この表から見られる特徴としては、該当諸本は比較的祖型を保つ傾向が強いものが多い

という点があげられる。しかし、〈双子本〉などを除けば、諸本間で借用箇所があまり一致していないため、最初に絵巻を取り入れた一本から派生しているわけではないだろう。また、何度も転写を繰り返して、絵巻の祖型から離れてしまった図様も見受けられる。一つの画面の中に、粉本から引き継いだ絵巻の図様と、新たに取り込んだ絵巻の図様が混在している可能性があることは留意しておく必要があるだろう。

以上のことから、「六波羅合戦巻」の借用内容を諸本の分類基準の一つにすることは、現時点では困難であるといえる。しかし、屏風の改変の際に「六波羅合戦巻」の図様が直接的にも間接的にも非常によく利用されており、特に合戦場面における人馬の図様は、粉本として適した資料だったということが指摘できる。

B. 「平家物語扇面絵」との共通性

本稿で「平家物語扇面絵」と記すのは、江戸時代に同一工房で制作されたと考えられている、同じ内容を持つ小扇面絵の作品群のことである。根津美術館所蔵「平家物語画帖」（各一七×二七cm）をはじめ、ベルリン国立アジア美術館所蔵「扇面平家物語」・徳川美術館所蔵「平家物語図扇面」・遠山記念館所

蔵「源平武者絵」などが現存する。本稿では、「平家物語語画帖」(以下、「扇面画帖」又は「画帖」と記す)を代表とする。

一連の扇面絵については、松原茂氏¹⁰⁾によって、「保元平治物語画扇面」や『平治物語絵巻』に共通する図様があることが明らかにされているが、本稿では、「源平合戦図屏風」にも扇面絵と共通する図様が多数確認できることを指摘する。

一つは「業盛最期」である。これまで述べた通り、平家公達末路の場面は不明瞭化していく傾向がある。業盛が地上で組み合う図様は、〈智積院本系統〉の他、誓願寺本などの数本でしか確認できない。その代わりに、他の屏風では、祖型には存在していなかった場面がいくつか描かれるようになる。そのうちの一つに、馬上で一方の武士が、もう一方の武士の首元付近を掴んで引き寄せる、出光本(No.33)(図8)のような図様を持つ諸本が現れる。絵のみでは、この場面の特定は困難だが、本圀寺本(No.16)の付箋には業盛の名が記されており、これが「業盛最期」のリニューアル版であることが想定できる。だが、付箋は後補の可能性もあり、根拠としては弱い。そこで意識したいのが粉本の存在である。「源平合戦図屏風」諸本の基本構成図は一つの祖本から派生しているが、改変の際には絵巻や芸能、文字テキストなど、幅広い資料を参照している。そのため、資

料のジャンルに捕らわれず、様々な絵画資料を調査した結果、小絵と呼ばれる「扇面画帖」(図9)に一致が見られたのである。「扇面画帖」の詞書には、「浜いくさの事」として覚一本に近似する「業盛最期」の記述があり、これによって、本圀寺本の付箋と「扇面画帖」が同じ認識を持っていることが確認できるのである。

「二之懸」においても扇面絵との共通性が見られる。大英本のように徒立ちの直実を描く諸本では、右手に太刀を握る直実の左手の描写は大きく三パターンに分類できる。左手を下げる(大英本(図3)など)、両手で太刀を持つ(誓願寺本(図6)など)、左手を前へ突き出す(かいじあむ本(No.18)(図10)など)のパターンである。そして、かいじあむ本の図様が、「扇面画帖」(図11)と共通しているのである。なお、誓願寺本では直家が同様のポーズをしており、扇面絵との間接的な影響関係も考えられる。

左隻「屋島合戦図」にも、「鍛引」の場面に扇面絵との共通性が見出せる。特に旧麻布本(図12)は、人馬のポーズが「扇面画帖」(図13)とほぼ同図である。倒れた馬の位置は異なるが、扇形の扇面絵では馬の位置を上げざるを得ないだろう。景清が掴み取った鍛を長刀にかかげる図様は、覚一本の「長刀

杖につき、甲のしころをさしあげ」の記述を踏まえている。祖型と考えられる宇和島本は、景清がみおの屋の鍔を掴む瞬間の描写で、覚一本の「（景清は）右の手をさしのべて、みをの屋の十郎が甲のしころをつかまんとす。…（略）四度のたびむずとつか」む記述を踏まえているが、合戦全体を俯瞰的に描く屏風においては、あまり目立つポーズではない。これを改変することによって、景清の活躍をアピールすると同時に、より「鍔引」の場面であることが認識されやすくなっているのである。

なお、みをの屋の脇に倒れている馬は祖型には無く、大英本の「二之懸」（図3）における直実の射られた馬と同じ「六波羅合戦巻」からの借用である。よって、両者の共通図様にも絵巻からの借用が見られることが指摘できる。

この他、【別表1】に示した通り、扇面絵と共通する図様を持つ諸本は多く、「重衡生虜」（キオソネ本（No.21））【図14】・「知章最期」（神戸市博本（No.9））【図15】・「経正最期」（ケルン本（No.27））などをあげることができる。

このことは、両者の成立時期を推定する手がかりの一つにもなる。注目したいのは、「扇面画帖」との共通性が見られる屏風は、いずれも改変された図様をもつものに限られるという点である。つまり、室町時代の祖型を改変した後の図のみが扇面

絵に共通するということは、扇面絵の成立時期を推定する上でも、貴重な情報源になり得るといふことである。前掲の松原氏は、「一連の平家絵小扇面を一七世紀後半という範囲の中でとらえておきたい。絵師の筆者を特定することはできないが、土佐派の系統に連なる絵師グループであることは疑いなく」と推定する。いっぽう、屏風には十七世紀前半の成立と推定される諸本が複数ある。仮に両者が推定通りであれば、屏風が先行することになるが、先にあげたいいくつかの例からも分かるように、扇面絵との共通箇所が諸本間でばらつきがあり、特定の屏風を粉本として扇面絵が成立したとは考えにくい。たとえば旧麻布本は複数の資料を多様しており、「鍔引」の場面にも何らかの粉本があったはずである。とすれば、十七世紀前半には、その資料が先行して成立していたと推定できる。それがどのような形態のものなのかは不明であるが、おそらくその資料（もしくはその内容）が流布しており、屏風絵や扇面絵の制作の際にも粉本として利用されたのであろう。旧麻布本について、田沢氏が、「九州の大名に伝わったものと言われており、地理的に近い赤間関で絵解きに用いられ名高かった障子絵を写し、粉本として利用していた可能性が認められる」と推定するように、旧麻布本が九州で成立したのであれば、この資料もまた九州に

伝わっていたことは疑いないだろう。

C. 押絵貼屏風からの図様の借用

屏風の種類の一つに押絵貼屏風がある。簡単に言えば、直接屏風に絵を描く形式のものに対し、個別に描いた複数の絵を屏風に貼り交せる形式のものだが、始めから屏風として制作されたものと、絵巻などの一部を屏風に仕立てたものがあり、本稿では前者と考えられる屏風を対象とする。押絵貼屏風は、その性質上、『平家物語』全体を題材にする作品も多く、直描き屏風とは、接近しながらも異なる過程を経て成立していったと考えられる。押絵貼屏風の調査は今後進めていく予定だが、直描き屏風の改変の際に押絵貼屏風の図様を借用するケースがあることが複数確認できたので、本稿では一例のみ簡単に触れたい。

〔三つ子本〕である北方本・山種本・徳川本(No 34-36)の「屋島合戦図」には、他の屏風には見られない共通の場面がある。諸本の大半は「嗣信最期」の場面に、船上の義経が馬上の佐藤嗣信を射落とす瞬間を描写している。その点この三本も同様だが、その上段部に、瀕死の嗣信が義経の膝を枕に横たわる場面を描くのである。三本は概ね同図だが、北方本〔図16〕のみは、義経らが座る庭のようなものが、赤いグラデーシヨンの薔

薇の花びらのような鮮やかな色彩になっている。他の諸本には見られない独特の彩色方法であり、画面全体を見渡してもこの場面のみ異質な感を受ける。北方本が配色にアレンジを試みたようにも思えるのだが、そうではなく、むしろ、北方本が粉本に忠実に従った故の違和感だったのである。というのは、赤間神宮所蔵「源平合戦絵図」〔図17〕に、これとほぼ同じ構図・彩色を持つ場面が認められるからである。義経ら人物の図様も酷似しており、おそらく北方本は「源平合戦絵図」を直接参照して同場面を描いていると考えられる。このことから、北方本が〔三つ子本〕の原本に当たる可能性をも想定できるのである。

「源平合戦絵図」は十幅のみ現存するが、元は押絵貼屏風と考えられている。北方本は、戦国時代に伊予国の武士であった村上吉清所持とする伝来がある。村上水軍として名高い村上氏は、『平家物語』において西海の合戦で大きな役割を果たした河野氏の家臣であったことは留意すべきだろう。「源平合戦絵図」についての詳細は不明だが、作者と伝わる海北友松と村上吉清が同時代の人であることや、赤間関と伊予国が地理的にも近い場所であることなどから、「源平合戦絵図」を粉本にしやすく、両者はそれほど時を経ずに制作されたのかもしれない。

- (1) 『日本屏風絵集成』第五卷、講談社、一九七九年)、田沢祐賀「平家物語 一の谷・屋島合戦図屏風の諸相と展開」(『秘蔵日本美術大観1 大英博物館1』、講談社、一九九二年) ※川本氏は、合戦全体を大観的に描くか一場面のみを人物中心に描くかで第一類・第二類に分類し、第一類を『平家物語』の記述に忠実か否かでその他に細分化した。田沢氏は第一類に該当する諸本をA・D類・その他に細分化した。拙稿「源平合戦図屏風」の二考察—いわゆる「一の谷・屋島合戦図屏風」の分類方法について—(『軍記と語り物』50・二〇一四年三月)
- (4) 前掲、田沢氏論文
- (5) とりわけ屏風のような大型作品の制作において、粉本に絵巻や屏風を利用する際は、原本を直接見ながらの作業は難しい。おそらく、先に原本を模写し、それを粉本として用いるのだろうが、彩色まではせず、一部に色注を附すのみのケースも多かったのだろう。また、その模写絵は保存されて、絵手本として他の作品の制作にも利用されていたと考えられる。時代は下るが、久留米文化財収蔵館には、久留米藩御用絵師三谷家の手による、楮紙に原寸大に描かれた屏風の下絵と思われる資料が複数収蔵されている。彩色・色注が皆無のもの、部分的に淡彩・色注が施されているものなど様々である。
- (6) このうち、場面「老馬」の有無については、柳澤恵理子「近世における「一の谷・屋島合戦図屏風」の生成とその展開—耕三寺博物館所蔵「源平合戦図屏風」を中心に—」(『学習院大学人文科学論集』24、二〇一五年)に指摘がある。
- (7) 章段「老馬」の三場面のうち、まず「老馬」「鷲尾父子」が加わり、その後に「通盛・小宰相」が追加されていたと考えられる。右隻の右上段は、祖型では背景の山々が描かれるのみで、物語としての見どころは無かった。そこで山中のエピソードとして、章段「老馬」から二つの場面を追加することで、レイアウトをほとんど変えることなく
- 一の谷合戦の見どころを増やし、且つ、画面全体を有効活用することに成功したのである。さらに、建物の複雑化・増築化に伴い、合戦場面ではないが、同章段の最初のエピソードである「通盛・小宰相」の場面を、仮屋と共に追加したのだろう。
- (8) a・cは、前掲、田沢氏論文。d・eは、前掲、柳澤氏論文・岡部恵理子「平家物語」の絵画化—個人蔵「一の谷合戦図屏風」について—」(『哲学会誌』38、二〇一四年五月)。fは、拙稿「久留米市文化財収蔵館収蔵「平家物語図」・源平合戦図」について」(松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』、笠間書院、二〇一五年)。
- (9) 一九八九年の閉館後、行方が分からなくなっていたが、アメリカのジョン・C・ウェバーコレクション収蔵「一の谷・屋島合戦図屏風」が当屏風と同図で損傷箇所も一致しており、同一の屏風であろう。本論では旧麻布本と記す。
- (10) 松原茂「根津美術館所蔵「平家物語画帖」と同工作品」(根津美術館「平家物語画帖」、二〇一二年)
- (11) 富士美術館本 (No.13)・赤間神宮本 (No.17)・香川ミュージアム本 (No.31) など。
- 『引用テキスト』
龍谷大学本『平家物語』：『平家物語下 日本古典文学大系34』(岩波書店、一九五九年)
『源平盛衰記』：『源平盛衰記(七) 中世の文学』(三弥井書店、二〇一五年)
- 中院本『平家物語』：『校訂 中院本平家物語(下)』(三弥井書店、二〇一一年)

《図版》

智積院本・誓願寺本：『日本屏風絵集成 第5巻 人物画―大和絵系人物』

（講談社、一九七九年）

宇和島伊達文化保存会本：永積安明他『図説 日本の古典九 平家物語』

（集英社、一九八八年）

大英博物館本：『秘蔵日本美術大観1（大英博物館1）』（講談社、

一九九二年）

かいじあむ本：山梨県立博物館HP <http://www.museum.pref.yamanashi.jp/index.html>

出光美術館本：『やまと絵』（出光美術館、一九八六年）

麻布美術工芸館寄託（ウエーバーコレクション）本：Arts of Japan John C.

Weber Collection [http://archive.artsmia.org/weber-collection/](http://archive.artsmia.org/weber-collection/preview6.html)

preview6.html

キオソネ本：『秘蔵日本美術大観（12）ヨーロッパ蒐蔵日本美術選』（講談

社、一九九四年）

赤間神宮所蔵「源平合戦絵図」：『赤間神宮 源平合戦図録』（赤間神宮社

務所、一九八五年）

早稲田大学所蔵『平治物語絵巻』：早稲田大学図書館HP 古典籍総合デー

ス <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.htm>

【付記】

屏風絵の調査にあたり、閲覧・撮影許可・画像提供を賜りました各機関

各位に、厚く御礼申し上げます。

【別表1】源平合戦図屏風比較一覽表

No.	所藏者	智積院本系統		員數	右隻	左隻	平	扇	押	盛	謡
		双子	双子								
		姉妹	三つ子								
22	ラリー・エリソン・コレクション(狩野甚之丞筆)			6曲1双	一谷	屋島		○			○?
21	ジェノヴァ東洋美術館(エドアルド・キオソネ)			6曲1双	一谷	屋島		○			
20	松岡美術館			6曲1双	一谷	屋島		○			
19	有馬記念館(三谷昌信筆)			6曲1双	一谷	屋島	○	○			
18	山梨県立博物館(かいじあむ)			6曲1双	一谷	屋島		○			
17	赤間神宮(伝狩野元信筆)			6曲1双	一谷	屋島		○			○
16	大本山本願寺			6曲1隻	一谷	—		○			○
15	埼玉県立歴史と民俗の博物館			6曲1双	一谷	屋島		○			
14	永青文庫			6曲1双	一谷	屋島		○			
13	富士美術館(海北友雪筆)			6曲1双	一谷	屋島		○			
12	今治市河野美術館(伝土佐光起筆)			6曲1双	一谷	屋島	○				
11	出光美術館			8曲1双	一谷屋島	壇浦	○				
10	誓願寺			6曲1双	一谷	屋島	○				
9	神戸市立博物館(狩野吉信落款)			6曲1双	一谷	屋島	○				
8	リンデン民俗学博物館			6曲1双	一谷	屋島	○				
7	旧麻布美術工芸館寄託(ジョン・C・ウエーバーコレクション)			6曲1双	一谷	屋島	○				○
6	城端別院・善徳寺			8曲1双	一谷	屋島	○			○	
5	大英博物館			6曲1双	一谷	屋島	○			○	
4	天真寺			6曲1双	一谷	屋島	○				
3	メトロポリタン美術館			6曲1双	一谷	屋島					
2	宇和島伊達文化保存会(狩野興甫筆)			6曲1双	一谷	屋島					
1	智積院(室町末期)			6曲1隻	一谷	—					

No8 リンデン	No7 旧麻布	No5 大英	No4 天真寺	No2 宇和島	No1 智積院	場面	章段
×	×	×	×	×	×	通盛・小宰相	老馬
○	○	×	×	×	×	老馬	
○	○	×	×	×	×	鷲尾父子	
○	○	○	○	○	○	一二之懸	一二之懸
○	○	○	○	○	○	河原兄弟	二度之懸
○	○	○	○	○	○	二度之懸	
○	○	○	○	○	○	生田の範頼軍	坂落
○	○	○	○	○	鹿のみ	鹿を射る武知	
○	○	○	○	○	○	坂落	
○	○	○	○	○	○	平家、海へ逃走	
○	○	○	○	○	×	教経逃走	
○	○	○	○	○	○	盛俊最期	越中前司最期
○	○	○	○	○	○	忠度最期	忠度最期
○	○	○	○	○	○	重衡生捕	重衡生捕
○	○	○	○	○	○	盛長逃走	
○	○	○	○	○	○	敦盛最期	敦盛最期
× ?	○	○	○	○	○	業盛最期	知章最期
○	?	○	○	○	○	経正最期	
× ?	?	○	×	○	○	経俊・清房・清定最期	
○	○	○	○	○	○	知章最期	
○/○	○/×	○/×	○/×	○/×	○/×	井上馬、船へ/陸へ	
○	○	○	○	○	○	師盛最期	落足
○	○	○	○	○	○	通盛最期	

【別表2】 覚一本 『平家物語』 卷九の場面一覧表



【図1】宇和島本「源平合戦図屏風」



左隻「屋島合戦図」

右隻「一の谷合戦図」



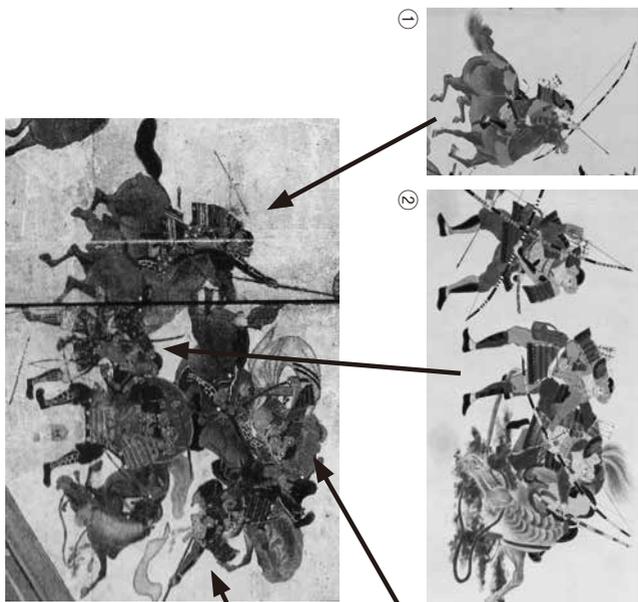
【図2】智積院本「一二之懸」



【図6】誓願寺本「一二之懸」



【図7】旧麻布本「一二之懸」



【図3】(上) 早稲田大学本『平治物語絵巻』／(下) 大英本「一二之懸」



【図4】宇和島本「業盛最期」



【図5】大英本「業盛最期」





【図8】出光（一の谷）本「業盛最期」



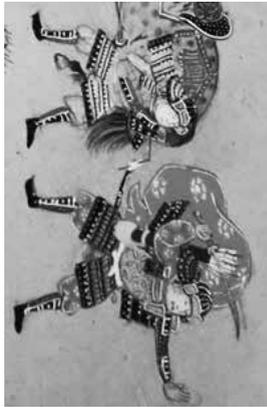
【図10】かいじあむ本「一之懸」



【図12】旧麻布本「鏝引」



【図9】平家物語画帖「浜軍」

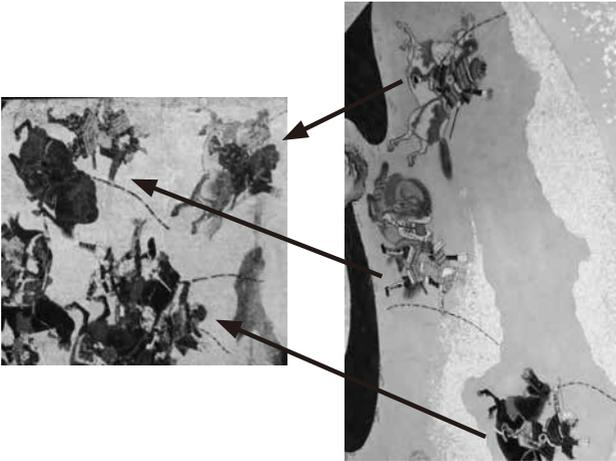


【図11】平家物語画帖「一之懸」

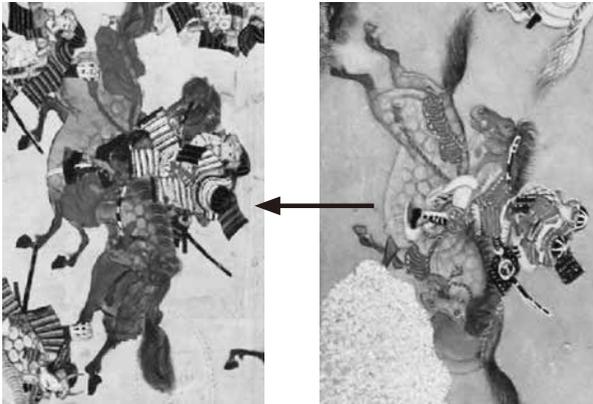


【図13】平家物語画帖「鏝引」

【図14】「重衡生駒」(上) 平家物語
画帖 / (下) キオツネ美術館本



【図15】「経正最期」(上) 平家物語
画帖 / (下) 神戸市博本



【図16】北方本「嗣信最期」



【図17】源平合戦絵図「嗣信最期」

